

ネギ黒腐菌核病の発生について

1. 病害虫名：ネギ黒腐菌核病 (*Sclerotium cepivorum* Berkeley)
2. 発生作物：ねぎ
3. 発生の経過
令和4年5月下旬、県中央部の初夏どりねぎ(品種：坊主不知)ほ場において、ねぎ地上部の黄化・枯死及び地下部の茎盤部付近の葉鞘部表面に黒色小粒の菌核が多数確認された(図-1～3)。
秋田県農業試験場と秋田県立大学が遺伝子診断等をしたところ、ネギ黒腐菌核病(*Sclerotium cepivorum* Berkeley)と同定された。
本病は主に関東地方や東海地方のねぎで問題となっている病害であり、本県では初確認となる。
4. 病徴または形態等の特徴
 - (1) 地上部では、下位葉が黄化し生育不良となり(図-2)、病勢が進展すると枯死する。
 - (2) 地下部では、根腐れを起こし引き抜けやすくなる。また、発病部位には黒色ゴマ粒状の菌核を形成し、病勢が進展すると黒いかさぶた状になる(図-3)。
 - (3) 伝染源は発病株に形成された菌核であり、土中で4年以上生存する。また、菌核は発病株や土壌とともに移動する他、風雨によってもほ場内やほ場間を容易に移動する。
 - (4) 本菌は比較的低温で発生しやすく、発病適温は10～15℃である。
 - (5) 土壌pHが低くなるほど、発生しやすい。
5. 宿主範囲
ねぎ、にんにく、たまねぎ、にら等
6. 防除対策
 - (1) 発病株や被害残渣はほ場にすき込まず、ほ場外に持ち出して処分する。
 - (2) 他ほ場への菌核等の持ち出しを避けるため、作業機械等は十分に洗浄して土を落とす。
 - (3) 株分けによる栽培では、発病していない株を選び苗として使用する。
 - (4) 本病発生ほ場では連作を避け、4～5年以上は宿主範囲以外の作物を栽培する。
 - (5) 登録農薬で定植前に苗への灌注処理を行う他、土寄せ前に薬剤処理を行う(表-1)。
 - (6) 石灰資材により土壌pHを矯正する。

7. 資料



図－1 発病ほ場の様子



図－2 地上部の状況



図－3 発病株の地下部の病徴

表－1 ねぎの黒腐菌核病の防除薬剤

FRAC コード	農薬名	使用時期	希釈倍数 又は使用量	散布液量	使用方法	本剤の 使用回数	各成分の 総使用回数
7	バレード20フロアブル	育苗期後半～定植当日	100倍	セル成型育苗トレイ1箱または、 ペーパーポット1冊*1当り0.5L	灌注	1回	3回以内*2
		収穫前日まで	2,000倍	100～300L/10a	散布	3回以内	
2	スミレックス水和剤	収穫21日前まで	1,000倍	100～300L/10a	株元散布	3回以内	3回以内
3	モンガリット粒剤	生育期 但し、 収穫14日前まで	6 kg/10a	—	株元散布	3回以内	3回以内*3
7	アフェットフロアブル	生育期 但し、 収穫14日前まで	1,000～2,000倍	1L/m ²	株元灌注	2回以内	4回以内*4
7	カナメフロアブル	収穫前日まで	4,000倍	100～300L/10a	株元散布	4回以内	4回以内
11	メジャーフロアブル	収穫前日まで	2,000倍	100～300L/10a	散布	3回以内	3回以内
12	セイビアーフロアブル20	収穫前日まで	1,000倍	100～300L/10a	散布	3回以内	3回以内

* 1 : 約30×60cm、使用土壌約1.5～4L * 2 : 灌注は1回以内 * 3 : は種時は1回以内

* 4 : 株元灌注は2回以内、散布及び無人航空機散布は合計2回以内

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660
 秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326
 掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>